



「青 窓」

有田高等実業青年学校

「私は初夏の頃が一番好きです。青々と果てしなく澄みきった大空を心ゆくまで眺めたり、草木の新芽が日毎に新緑の香りを運び風に漂わせて鼻につく時、何とも言えない新鮮な気持ちになります。」

わけても雨上がりの草木は趣が深い。」

(普2女 山崎幸子)

これは有田高等実業青年学校(以下「有実」という)校友会誌「青窓」に掲載された生徒作品です。

有実は、有田徒弟学校廃止後に現在の有田陶磁美術館で高等小学校の卒業生に製杯と陶画の実習を行っていました。大正15年、有田小学校古川邦司校長により「有田公民学校」となり発足したのですが、昭和14年「有田高等実業青年学校」に改組されました。

場所は現在の森病院と北側の駐車場(白川)です。当時の校長は松隈龍雄先生で17人の教職員と400人の生徒がいましたと中の原の辻 道太さんが話してくれました。

本科2年、高等科2年で、普通教育・職業教育・公民教育・鍛練教育を基本としていました。

松隈校長の教育方針は次の通りです。

- ①頑丈な体格の持ち主を作る。
- ②みっちり実力をつけ、魂と技を養う。
- ③勤労を楽しむ人を作る。
- ④自制力のある人を育てる。
- ⑤明朗快活な伸びのびとした人を作る。

そのベースとなるものは訓育中心主義でした。

言われなければせぬ、自発的に善いことをやることに欠けているので、これを改めるため部落自治会と学



▲ 昭和15年9月10日、有田小学校校庭で行なわれた有実学生の教錬研究発表会



▲ 有実生徒の作品

級自治会の当番を毎週交替してやらせる。こうして自制力の訓練に努めると共に、一貫した指導体制をとるため毎週土曜日に教師打合会を開くとあります。

そして高飛車な、高圧的な指示、命令をさげ、生徒自身より盛り上がってくる力を凝視して善導していく伸びのびとした弾力性のある人間を育てるとあります。ある若い生徒愛に燃えた先生が、職員室に足を引きずり入ってこられた。それは前日、先生が出張中生徒が騒いだと聞き、いたく責任を感じ生徒と共に40分余り、蒸し暑い廊下の板敷きに端座された結果と判り、生徒代表4名が先生私宅を訪れ、今後このようなことをしないとお詫びに来たとエピソードが記されています。

当時日中戦争の始まったころであり、卒業生男子は次々に戦地に赴きました。元町議の北川美則さんも和田隊に所属し戦傷したと記録されています。

生徒の一人、中島太郎さんは作文の中で「芸術の究極のものを決めるものは、知識や体験ではなく操(自分なりのゆるぎない哲学)の問題であろう」と。

村島文治さんは「一旦企てた希望には、如何なる辛苦艱難があっても終始一貫するの意気を以て邁進すべきだ。七転八起の意気をもて」と書いています。

また、池田絹子さんの作文では「帰るに家なく、食うに食なき哀れな支那(筆者注:現在の中国)の良民を見る度に…」と戦争の悲惨さを綴っておられます。

昭和14年度の先生は次の通りです。(敬称略)

松隈龍雄、山崎利八、中尾勝、山内健造、田中照次、百田信一、岩永常一、溝上廣雄、松尾勝佐、古川佐一、宮田幸太郎、前田實、林俊二、樗木ライ、深川綾子、松尾国枝、加藤仙乗、高柳和平次、北村馨 (久富)

皿 山 夏

No. 46

手塚兄弟と森村組

明治維新、つまり徳川幕府から明治新政府へと「時代の関節」ともいえる大きなうねりを受けた19世紀の中ごろのこと、まだ130年ほどの時間しか経過していないのに、明治期の有田の歴史の中でどうしてもわからないことがあります。例えば一世を風靡した深海墨之助・竹治兄弟の顔写真は、まだ探し出すことができません。同時代に活躍した八代深川栄左衛門や辻勝蔵、あるいは少し前に登場した田代紋左衛門などの人物は確認できたにもかかわらずです。おなじくリーダーの一人であった手塚亀之助の場合も然りで、書かれたものの中でしかその生きざまを知ることができませんでした。このことは子孫が有田在住でなかったり、転居を重ねていくうちに資料が散逸してしまったということが大きな要因といえます。ところが前号で紹介した「幻の画家片岡源次郎」の調査を進める中で、長年探し求めていた明治のリーダーの一人「手塚亀之助」の子孫が東京においでだということがわかったのです。はやる気持ちを抑えかね今年1月、95歳になるという松本孝子さんを訪ね上京しました。

手塚亀之助・国一親子の夢

東京都南青山在住の松本さんは、高齢を感じさせないしっかりとした記憶で祖父手塚亀之助やその長男国一（写真①）、次男で父の栄四郎（写真②）について語ってくださいました。亀之助の死去5年後の明治38年に生まれた松本さんは、直接の見聞はないものの祖父について父から聞かされた話を、傍らの梁井新一さん（松本さんの甥・亀之助曾孫）と確認しながら語っていただきました。（写真③）

明治8年に合本組織香蘭社を創立した後、八代深川



①手塚 国一さん
(手塚一郎さん所蔵)



②手塚栄四郎さん
(手塚一郎さん所蔵)



③ 松本孝子さん（右）と梁井新一さん（左）

栄左衛門と意見が分かれたことにより、深海墨之助らと精磁会社を興した祖父手塚亀之助は、晩年失明しながらも次男栄四郎らとともに会社の運営にあたりました。しかし時代の流れもあったのでしょうか、技術的には優れた製品を生み出していた精磁会社は明治30年代には経営に行き詰まり解散してしまいました。それ以前の明治14年、アメリカ・ボストンの陶器商アブラハム・フレンチの三男アーサー・フレンチが有田を訪れ40日間ほど滞在しています。彼はこの間精磁会社の洋食器製造方法についてさまざまな指導を試みています。同社は翌年からアメリカ向けの製品を起立工商会社を介してフレンチ商会へ輸出しました。有田では大樽の手塚家（現在の嬉野家）を宿舍とし、食事は佐賀市より牛肉・野菜などを運んで賄いましたが、給仕には当時12、3歳の国一が当たりました。父亀之助や深海墨之助らは米国生活の経験がありましたが、後に米国女性を妻にする若い国一にとっては初めて接する外国人でした。その後自ら渡米資金をつくり、明治19年6月下旬、グーリック号に乗船し渡米しました。ときに19歳。きっと父やフレンチからアメリカという大きな市場での夢を聞かされたのでしょうか。

明治になって西洋文明の移入による日本の近代化が加速するにつれて輸入が急増し、そのために輸出の必要性が叫ばれ、それも居留地の外国商館を経由しない「直輸出」の方法で貿易を行うことが求められました。時代の流れを敏感に感じ取った国一青年は、有田焼の直輸出の目的を抱いて太平洋を渡り、精磁会社製品の見本1,500円分を手にしてワシントン・ニューヨーク・フィラデルフィアなど7都市を旅行して各問屋を回りました。その時受けた注文は井・皿・菓子鉢など総額3,500ドル（3,500円相当）にもなりましたが、残念なことに精磁会社の解散でこの契約は実行されませんでした。しかし、彼は屈することなく今度は小売店を経営するまでになり、その後明治31年に森村組の招聘を受け同社のニューヨーク支店に入社しました。

森村組とは

日本を代表する陶磁器メーカーともいえる、日本陶器（ノリタケ）、日本碍子（日本ガイシ）、東洋陶器（TOTO）、日本特殊陶業、伊奈製陶（INAX）の5つの会社は、その原点を幕末から明治・大正期にかけて経済界を生きた代表的な実業家、森村市左衛門に求めることができます。彼は東京・銀座で洋服店を営んでいた明治9年、弟の豊をニューヨークに派遣して森村組（森村商事の前身）を設立し、アメリカで日本の骨董品、陶器、提灯、人形などをクリスマスギフト向けに販売し大成功をおさめました。

森村組の当初のライバルは国の補助を受けて貿易を行っていた起立工商会社で、その社長は佐賀藩出身の松尾儀助でした。この会社は香蘭社や精磁会社などの製品を取り扱っており、つまりは有田のライバルでもあったといえます。その会社には有田出身の手塚国一・栄四郎兄弟が入社して森村精神ともいえる思想をもって活躍し、さらに東洋陶器会社の社長として敏腕をふるった江副孫右衛門へと引き継がれていきます。今盛んに言われる頭脳流失の走りともいえましょか。

大正12年の『大翁訓話』にはおそらく起立工商会社に対する森村翁の回顧であったのでしょう、次のように記されています。

「無利息で政府の金を借りて、外国の商売をすると、気ばかり大きくなるのと、お役人様のお指図を商売の上に受けなければならぬ。（中略）全体商売の本主意は、金利になる資本を遣って、其上の利益を取らねばならぬのに、無利息の金を遣う時は、どうしても気が解けて、苦しんで働く気象が無くなる。」

金利のついた金を使ってこそという勃勃たる商魂と自主独立の精神が、あらゆる困難を打破していく森村精神を生み出していったといわれます。また、「皿山 No.36」で既報の、手塚栄四郎が記した自叙伝にある森村の思想の一つ、「天に貸せ、借方に立つな」という言葉を紹介しましたが、これらがライバルであった有田皿山人に根づいたことは歴史のおもしろさともいえます。

ちなみに明治42年の森村組決算書によれば、米店員賞与金として手塚国一支配人に対し20,000円の賞与がありました。これを当時との物価の比較でみると、『明治・大正・昭和 値段の風俗史』から明治40年と平成12年の米、大工の手間賃、総理大臣の月給を例に

としてみるとつぎのようになります。

	米10kg	大工手間賃	総理大臣
明治40年	1円56銭	1円	1,000円
平成12年	4,000円	17,100円	2,344,000円
倍率	2,564倍	17,100倍	2,344倍

仮に米価の倍率で国一の賞与20,000円を計算すると約5,000万円ということになります。組織の長である村井保固が50,000円、森村市左衛門・大倉孫兵衛が35,000円でそれに次ぐものでした。国一の米国の邸宅（写真④）からもその生活ぶりは容易に想像できますが、森村組における国一の地位も確固たるものであったと思われます。



④ アメリカの手塚国一郎（松本孝子さん所蔵）

前号の片岡源次郎の生涯もそうでしたが、まだ100年ほどの時間の経過であってもその活躍が忘れかけられている先人たちに、今を生きる私たちは学ぶべき点が多々あるようです。

（尾崎葉子）

※文中敬称略させていただきました

＜参考文献＞

- ・手塚栄四郎著「自叙傳」 昭和16年
- ・「紐育日本人発展史」 大正10年
- ・「日本陶器七十年史」 昭和49年
- ・砂川幸雄著「森村市左衛門の無欲の生涯」 平成10年

お詫びとお知らせ

前号で紹介した大塚民助は為助の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

なお、片岡源次郎について最初にその情報を寄せていただいた米国在の上住升さんより「皿山」を読んだ感想と、2001年の春にアメリカで片岡源次郎とアメリカ初期印象派画家の作品を合わせた展覧会が企画されていることをお知らせいただきました。

古文書教室研修旅行

当館では毎月古文書教室を開催していますが、年に1回他地区の史料を研修する機会を設けています。今年は長崎市を研修の場としました。

4月12日、まず長崎県立長崎図書館で開催されている「出島展」を見学しました。出島を描いた各種の古地図や出島を舞台に活躍した人物に関する史料を、図書館の本馬貞夫先生から細かに説明していただきました。その後図書館所蔵の明治初期の有田の地図や、寛永4年の「幕府隠密復命書」などの史料を見ることができました。

その後復元事業が行われ、新たな装いを見せ始めた出島を見学。日蘭修好400年を記念して各種の行事が行われている長崎は多くの観光客で賑わっていました。



▲ 長崎県立長崎図書館展示室

新刊の案内

このほど2冊の出版物を刊行しました。ひとつは『有田皿山写真館』で、平成10年に開催した写真展で使った古写真とその後収集したものを合わせた写真集です。サブタイトルを「近・現代史を生きた女性たち」とし、幕末から現在まで有田の半天を支えた女性たちに焦点をあててみました。

もうひとつは『研究紀要第9号』です。テーマはふたつあって、①資料集「皿山雀」②有田における色絵磁器生産の変遷です。①の「皿山雀」は享保16年(1731)の有田の様子を書いたもので、古文書教室の受講生によって解説され、今回はさらに分かりやすく現代文も掲載しています。②は現在までの発掘調査をもとに研究成果を紹介しています。

販売場所、価格は次のとおりです。

- ・『有田皿山写真館』 定価 1,000円
販売場所 有田町歴史民俗資料館
有田陶磁美術館
- ・『研究紀要 第9号』 定価 1,570円
販売場所 有田町歴史民俗資料館



館報「皿山」45号(今年3月)に役場前の花水木ーグッド・ウィル・ツリーを紹介しました。

それには花水木をご寄贈くださった深海満治さんをご存知の方はいませんかと書いていました。

すると「知っている」とご返事をいただき、その反応の早さにびっくりした次第です。

第一報は3月2日朝早く今泉今右衛門さんからでした。今泉さんは深海さんと遠縁に当たるそうです。

先代今右衛門さんがお元気な頃、たびたび深海さんが訪問されていたそうです。深海さんはアメリカにグッドウィルツリーという珍しい木がある。これを出身地の有田町へ寄贈したいとの申し出があり、今右衛門さんより青木町長(当時)へ伝えられました。

実は昭和40年10月にアメリカ州知事一行13名が有田町を親善訪問しております。青木町長は、こういう経緯から「それは良いことだ」と快諾されました。

今右衛門さんの話によれば花水木(紅白)2本を何処に植えるか論議があったそうです。

初めは馴染めない木だから役場の裏側に植えることになったそうです。「いや、それでは深海さんのご好意に応えることにはならない」と意見がまとまり、役場の入口に植えることになりました。ここに紹介する絵は深海さんから今泉さんへ贈られた花水木の絵です。Flowring Dogwoodと書いてあります。



第2報は今右衛門さんと話が済んだ直後に戸杓の富永嘉代子さん(75)からでした。富永さんは当時柿右衛門工房にお勤めで、先代柿右衛門さんから「役場に珍しか木の植わっとる」と話を聞いたそうです。

その頃、役場にお勤めの古田元助役にお尋ねしました。「たしかに花水木の苗木が福岡から送って来た。当時、岩谷川内に住む植木職の菊竹さんが、青木町長や今右衛門さん立ち会いのもとに植えた」とのことでした。

残念ながら、薄紅色の花水木は枯れたようです。今年も96万人もの最高の来町者を迎えた陶器市に、白色の花水木が花を添えました。

このように由緒のある木ですから花水木の側に、陶板で「深海さんとグッドウィルツリー」のことを紹介したら良いのではないかと考えております。(久富)

季刊『皿山』

通巻46号(平成12年6月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185